

## 現実を嘆くのではなく、 人に喜ばれることを

大阪教会 新出委代さん

新出委代さんは、37年間にわたる人工透析の合併症により、下半身が思うように動かなくなって4年。生活援助サービスを受けていたが、訪問介護員から素気ない態度をとられたり、「余計なことはしないでください」と手伝いを拒否されるなどストレスを感じていた。そんなとき、仏教を共に学ぶ仲間のアドバイスで自分を省みた。両足が思うように動かない現実、生活環境を嘆いて悪態ばかりついている——この気づきから態度を改めると決心。注意や指摘を素直に受けとめ、帰るときには感謝を伝え笑顔で見送るようにすると、訪問介護員たちの表情はしい和らぎ、会話も自然と弾むようになった。重苦しい雰囲気だった生活援助サービスの時間は、仏の教えを実践する有り難い機会へと変化したのだった。新出代さんは、一つひとつの出会いを大切にすると定め、毎日を新たな気持ちで過ごしている。



## 生きがいをみつけよう

法華経ほけきょうの法師品ほしほんに「衆生しゆじやうを哀愍あいなんし願ねがつて此この間に生うまれ」とあります。苦しみが多いこの世に、私たちは願ねがつて人間として生まれきたというのです。見方を変えると、苦難もあれば喜びもある娑婆しゃは世界だからこそ、そして、私たちが真理まことや実相じつさうをつかむことのできる人間であればこそ、いまここに生きているということになります。

身近な人や家族、あるいは自分が、病気をしたり、亡くなったりするのは、ほんとうにつらく、悲しいことです。ただ、そのつらさや悲しみやおそれを心底しんぞこ味わうと、真実を見る目が開かれます。それは、苦しみ、悲しみ、つらさそのものが、救いのいとぐちになるということです。

そして、ここでいう「救い」というのは、たとえ人生のどん底どんぞこであえているときでも、そこに生きる意味や生きがいを見出し、前向きな力に変えていくことです。

救いと生きがいといっても、おおげさに考えることはありません。それを得るきっかけは、たとえば、夕飯の料理に最善を尽くすとか、あいさつを気持ちよくするなど、ささやかでも、あなたにしかできないことを喜びとして、それがまわりの人に喜ばれる、といったことです。それが、生きる意味や生きがいの核心ではないでしょうか。

# 立正佼成会